

南部鉄器の技術伝承に関する一考察

長　野　　遼

前書き

江戸期に地域社会を支えていた手工業が近代化と現代化によって衰退している。生産の世界規模化によって、この現象は急速に進んでいる。日本経済において中小企業の果たす役割が大きい事から、この状況の改善が求められている。この視点から技術伝承を行い、企業としての存続に努力している伝統的産業の南部鉄器業について、その様相の一端を検討してみよう。

一、盛岡藩と南部鉄器

南部鉄器の由来

南部信直は天正一八年の豊臣秀吉の小田原攻略に参陣し、同年七月一七日に秀吉から南部の七郡を与えられ、翌年には二郡が加増された。関ヶ原戦以降も徳川家康から南部の所領は認められ、一〇万石の領域が確定した。

盛岡城の建設は慶長三年（一五九八）から始められ、慶長一九年（一六一四）頃には石垣はほぼ竣工した。城下町の建設も進められ、中津川の北部を埋め立て、家屋や橋の建設を行つた。水害などの被害があり、城と城

下町などが整つたのは寛永一〇年（一六三三）ごろである。城の周辺には上級家臣の居住区、その外に町人区、さらに下級家臣区を設けた。北部丘には寺社を集めた。

寛永一二年（一六三五）の国書改竄問題の柳川一件で処分された柳川調興が津軽藩に流罪とされ、柳川調興を支えた以酌庵主の規伯玄方も国書改竄に関わったとして南部藩に配流された。南部藩は上方文化に造詣の深い規伯玄方からその文化の攝取に努めた。

方長老とも称された規伯玄方は、筑前国宗像郡出身で対馬藩の朝鮮外交を担つた景轍玄蘇の門人で、師に引き継いで朝鮮との外交問題を処理していた。臨済宗の僧侶であった。

臨済宗は建久二年（一一九二）に中国より帰国した栄西によつて始められ、筑前や肥後に広められたこともある。筑前には影響力があった。同郷の玄蘇に従つて規伯玄方は臨済宗に入門した。玄蘇は朝鮮との外交も対処していた対馬の以酌庵主であった。この以酌庵を二四歳で規伯玄方が引き継いだ。

規伯玄方は配流地の盛岡で上方文化を広め、南部鉄器や黄精飴の創出などに関わった。万治元年（一六五八）に赦されて京都の南禅寺に移つた。盛岡に二三年間在住した規伯玄方は、盛岡の文化興隆に大きな足跡を残した。

盛岡は上方文化を受け容れる素地が金山開発などであった。慶長三年（一五九八）に尾去沢で白根、五十枚などの金山が開発され、慶長年間（一五九六～一六一四年）には金山労働者が四千人ほど働き、金山周辺には数千件の鉱山街があつたとされている。このように規伯玄方が盛岡に配流された折は、金山開発で盛岡が潤っていた時期であり、城と城下街建設が進められ、それらが完成に近い時期であった。城下街並みが整い、金山開発により潤っていた。

物産の流通では仙台藩領の石巻港を通じて砂金、紫紺、馬、鉄器等が江戸に運ばれた。

二、南部鉄器の源流と変動

規伯玄方が芦屋釜を伝えた事が南部鉄器の始まりともいわれている。

芦屋釜は筑前国遠賀川の芦屋で造られた釜であり、歴史は古く建仁年間（一二〇一～一二〇三）明惠上人が芦屋の鋳物師に鋳させたのに始まるともされ、室町期が最盛期であった。形は専門の茶の湯釜が出現する以前の湯釜の形態を残したもので、真形釜としてこの形が江戸期には普及した。規伯玄方は筑前出身であり、茶道にも造詣があつたことから、規伯玄方が芦屋釜の製法を伝え、それが伝承されたとみられている。

南部藩は南部鉄器を製作する職人を統括していた。文政三年（一八二〇）九月の「御小納戸支配総人数書上」がある。これには御打物師、御絵師、御細工師など藩の御用達職人名が記載されている。この中に御釜師として小泉仁左衛門、御鋳物師として鈴木喜兵衛、鈴木忠七が記されている。「本場盛岡・南部鉄器・年表」が南部鉄器共同作業場に掲示されている。

これらをもとに南部鉄器の生産史をみれば、以下のように概括される。

慶長一八年（一六一三）に鋳物師の鈴木家綱が甲州から招聘されて盛岡に来住し、藩の命で梵鐘の鋳造を行った。万治二年（一六五九）に京都山城出身の小泉仁左衛門が御釜師として招かれ、盛岡で茶の湯釜や梵鐘を鋳造した。小泉仁左衛門を「本場盛岡・南部鉄・年表」では「南部鉄器の祖となる」としている。規伯玄方が許されて京都に移ったのもこの頃なので、規伯玄方が伝えたとみられる茶の湯釜の製作が進み、それを基にしてさらに鉄釜生産を進めるために、小泉仁左衛門が招かれたともみなされる。

宝永六年（一七〇九）に鍋善の祖とされる藤田善助が盛岡に来住した。このころに「三代小泉仁左衛門初めて鉄瓶を作る。（当時鉄葉罐とも称した）」と年表にある。これよりすれば、庶民にも広く使われていた鉄釜の質的向上が行われたとも解される。

安政四年（一八五七）までは年表には何も記載されていないので、この間は大きな変化はなかつたとみなせる。

安政四年（一八五七）には「盛岡藩士、大島高任、釜石に洋式高炉建設、日本で初めてその鉄精錬に成功、日本近代製鉄の基礎を築く」とある。盛岡では特筆すべきことであつたので記載されているが、この製鉄に鈴木家の七代鈴木忠七が関わったことが、店内に展示されている鉄塊についての説明から判明する。「安政年間、七代鈴木忠七が大島高任に随行し、釜石鉱山開立に当たり、橋野高炉1、2、3番高炉の炉工長として従事した際の鉄塊である（岩手県立鋳物館主任研究員の分析）」とある。大島高任の高炉による製鉄に鈴木忠七が炉工長として関わったことは、鉄釜や梵鐘の鋳造技術が活用されたことを示すものであり、大島高任の事業に在來の技術が大

きく貢献したとみなせる。盛岡にこれらの铸造技術が存在していなければ、大島高任の洋式高炉による製鉄も円滑にゆかなかつたとも解せられる。

明治維新による大きな社会的変動期の動向について、年表には記載されていはない。

明治九年（一八七六）に「明治天皇東北巡幸の際、県の特産品として小泉家の茶の湯器、有坂家の鉄瓶等を天覧に供する」とある。明治維新の変動にも関わらず、茶の釜や茶瓶が特産品として存続していたことが窺える。

明治一七年（一八八四）には「有坂富右衛門、鉄瓶の金気止め技法を考案する」とある。明治中期についての記載は、これ以外にはない。

明治四三年（一九一〇）に「南部鉄瓶研究会組織される」とある。組織的な取り組みが開始されたことが窺われる。明治三三年（一九〇〇）三月に中小企業の保護を主旨とした産業組合法が公布され、加入・脱退の自由、決議権平等の規定から、同業組合が産業組合として組織替えする動きが強まり、各地で産業組合が設立された。この動きに基づいて、明治四三年（一九一〇）一月七日に産業組合中央会が設立されて、中小企業の新しい動きが始まった。南部鉄器業会も、これらの動きに応じた対応がなされていることがみられる。

大正二年（一九一三）年に「盛岡出身の鋳金工芸家松橋宗明が、南部利淳の支援を得て「南部鋳金研究所」を設立する。意匠や铸造技術の向上に大きな役割を果す」とある。松橋宗明が大きな影響を及ぼし、南部鉄器の質を向上させたことが出ている。

松橋宗明は、明治二二年（一八八九）に東京美術学校に入学して鋳金科

で铸造に関する事を学び、卒業後は作品作りに従事していた。大正三年（一九一四）六月に盛岡藩主に経由する南部利淳が南部鉄器の質的向上を行うために設立した南部鋳金研究の運営のために招かれ、南部鉄器の品質向上と販売域の拡大に努めた。

職人の意識改革のために、松橋宗明は東京などの展覧会への出品を勧め、他の地域との交流を通じて視野を広げさせた。その成果は大正七年（一九一八）の農商務省主催の展示会で盛岡の出品が多数入賞したことに対現れた。この成果に基づいて、大正九年（一九二〇）に盛岡で全国金工品共進会を開催した。このときも盛岡の諸作品が多くの賞を得た。

松橋宗明を支えたのが南部鋳金研究所の研究員高橋萬治で、デザインや製作技法の指導で南部鉄器の質を向上させた。これらの努力によつて南部鉄器の評価が高まり販路を拡大した。

大正九年（一九二〇）に「この頃生型铸造法導入。量産化への道がひらく」とある。乾燥工程を省いて湿った砂で鉄型を造る方法が導入されたことでコストが減り、また量産が可能になった。

昭和一三年（一九三八）に「鉄統制令施行。鉄の使用が制限され工芸品の製造が困難になる」とある。昭和一二年（一九三七）七月に日中戦争が起り、軍需品生産のために鉄の使用が統制され、このことによつて南部鉄器の製造業者は大きな打撃を受けた。昭和一六年（一九四一）には鉄製品の製造が禁止されたことから、南部鉄器の製作技術が途絶える危機になつた。この状況打開のために鈴木盛久や小泉仁左衛門らは政府に度々陳情した。その結果、一六人に限り一人年二〇個以内の製作が認められ、技術途絶の危機は免れた。

それに基づいて鈴木等が南部鉄瓶技術保存会を結成し技術の保全に努め

ている。南部鉄瓶技術保存会名簿には五九人の名が記載されている。

昭和二〇年（一九四五）八月一五日の敗戦で戦争が終わり、戦時統制も解除された。南部鉄器の生産が再開された。

昭和二八年（一九五三）には「南部鉄瓶商工業協同組合共同作業所を盛岡市北山に設置」とあり、共同作業が設営された。

昭和四八年（一九七三）には「第二六回岩手日報文化賞、（産業部門）」とあり、文化賞を得てている。

昭和四九年（一九七四）には「一三代鈴木盛久、文化庁より無形文化財の指定を受ける」とある。一三代鈴木盛久は昭和四年（一九二九）にベルギー・リエージュでの万国博覧会の美術部門で金賞、二七年（一九五二）の第八回日展で特選、昭和三四年（一九五九）ベルギー・ブリュッセル万国博覧会でグランプリ賞を得ており、内外で高く評価されていた。これらの業績を通じて南部鉄器の価値が広く認識されていった。

昭和五〇年（一九七五）に「国の伝統的工芸品として第一次指定を受けた」とあり、南部鉄器が伝統的工芸品として認知されるようになつた。

昭和六一年には「盛岡手づくり村内に「鉄物工場及び南部鉄器共同組合が移転入居」とある。手づくり村は地場産業育成のために設けられた施設で、工房域では一四軒が共同組合を結成し運営にあたっており、同城では鉄釜製作の過程が見学できる。

以上「本場盛岡・南部鉄器・年表」によりながら南部鉄器の変遷を辿ってきた。江戸期には藩の保護もあって安定的に製作させていたが、明治期以降は保護がなくなつたことから苦境に立たされた。しかし、その難局を乗り越えたが、従来の技法の枠をあまり出ないでいた。これを転換させたのが南部鉄金研究所の設立であり、その所長であつた松橋宗明の活躍で

あつた。盛岡の枠から全国的視点に立つて製作することを指導し、共進会や博覧会に数多く入選するように発展させている。指導者の役割の重要性が示されている。

技術保全の面では、戦時中の鉄統制に対して度々の政府交渉によつて南部鉄器製作のうち一六人が一年に一人二〇個以内の製作を行うことを認めさせたことは、技術伝承の在り方として貴重な動きであつた。

三、鈴木主善堂での調査

二〇一二年一一月三〇日を訪れ、ご当主から色々と貴重なお話を伺いました。それを参考にして、鈴木家の主要な過程を見ると、以下のようであつた。

由来

京都で金工技術を習得した鈴木忠兵衛が元和二年（一六一六）に盛岡藩に招かれて藩の御用達職人となり、藩の依頼によって鉄器を製作してきた。江戸期には梵鐘など製作したことは、現存している諸梵鐘などから裏付けられる。

明治以降の動向

明治維新による社会変動で大きく変化し、藩の庇護がなくなつたことから、自力で維持してゆく事が求められた。この難局に対処するため、東北各地に赴き南部鉄器の注文を取つて回った。これによつて生産は維持された。

明治二一年（一八八八）に上野—盛岡間に鉄道が開通し、明治二四年

(一八九一)に盛岡—青森間も開通したことによつて、さらに注文とりの範囲を広げて南部鉄器の拡大に努めた。

第二次大戦の折は鉄器生産が統制されたが、一六人が一人年二〇個以内で製作を続けることを政府に認めさせ生産は維持された。

戦後期

戦後暫くの間は鉄器具の需要があり、生産が維持されたが、需要の変化、大量生産化などによつて鉄器製作諸家の廃業が続々、厳しい状況にある。

このような経緯を経て、幾多かの難局を乗り越えられた鈴木家であるが、現況は南部鉄器の需要減少によつて困難な状況にある。鈴木主善堂の鈴木さんは現況打開の方策について、以下のように述べられた。

大量生産化が進められているが、技術保全もあつて注文生産を続けている。質の良い物、お客様に喜ばれる鉄器づくりを行う。事業規模の拡大はあまり目指していない。長年続いた技術を保全し伝えてゆくことを心懸けている。

一七世紀から四〇〇年存続してきた老舗の真髓が語られた。

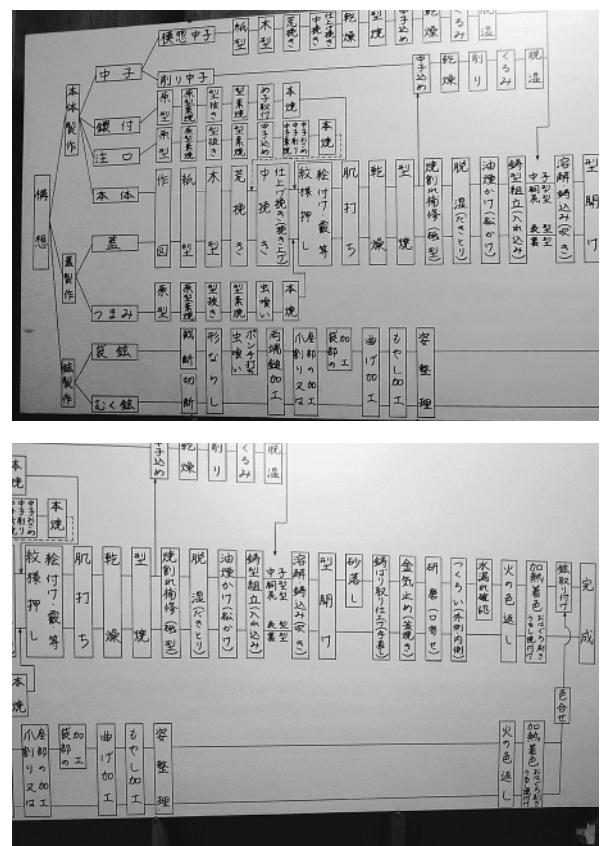
鈴木主善堂の生産

鈴木主善堂の店内に鉄釜の製作工程が示されている。資料1である。多

くの工程を経て製作されていることが窺われる。

伝統的設備

鈴木主善堂の作業所に貴重な設備が保存されている。資料2である。



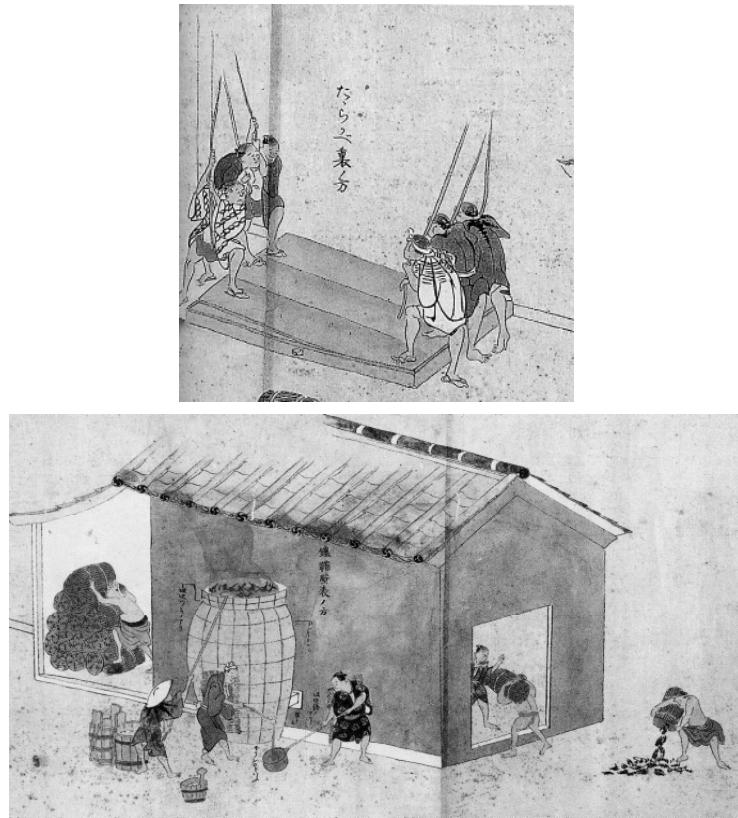
資料1 鈴木主善堂の鉄金の製作工程

鈴木家は鈴木縫殿家綱を宗祖先とし、元和二年（一六一六）に初代鈴木忠衛が南部盛岡鑄師として召し抱えられて以来、約四百年にわたつて代々中忠兵衛を名乗つて継承されてきた。この踏鞴は平成一〇年五月一三日に盛岡市指定有形民俗文化財となつており、この踏鞴について一二代鈴木忠兵衛が平成一〇年六月に記した説明文がある。以下のようである。

鈴木家は鈴木縫殿家綱を宗祖先とし、元和二年（一六一六）に初代鈴木忠衛が南部盛岡鑄師として召し抱えられて以来、約四百年にわたつて代々中忠兵衛を名乗つて継承されてきた。この踏鞴は平成一〇年（明治十八年・一八八五）に再建された工房内に設置された装置。この踏鞴は昭和初期まで使用された。現存する踏鞴としては東北唯一のものである。鞴場を熱から保護した仕切り土壠やこしきなど一式が保存されており、鉄器铸造文化の歴史を伝える史料としても貴重な文



資料2 伝統的鋳造設備



資料3 唐津地域での18世紀後半期の鋳造の状況

注 中里紀元『肥前国唐津領産物図考の研究』(松浦文化連盟、平成17年) 124頁を加工。

化財である。

踏鞴、こしき炉の機能が簡潔に記されている。

写真の左部分が天秤鞴で風を送っていた所である。踏み板は引き上げられて壁に立てかけられている。右部分がキューポラや作業用道具と鋳られた鉄釜がある。キューポラで溶融された鉄湯が鋳型に流し込まれ、鉄釜が造られる。

天秤鞴は享保期（一七一六～一七三五）に考案されたと言われており、送風量が増えた事から火力が高まり、鋳造量が増加した。長時間踏み続ける必要があり、重労働であった。

唐津地域でも天秤鞴が一八世紀後半期に普及していたことは、木崎盛標が描いた「肥前国唐津領産物図考」にも描写されていることから判明する。

「肥前国唐津領産物図考」には紙漉き、捕鯨、石炭採掘など多様な業種が描かれており、当時の物づくりと生業を知る上で貴重な絵図である。

資料3の上図は鞴を踏んでいる様子が描かれている。この作業は下図の家屋の中で行われている。この様子から天秤鞴が一八世紀後半期には普及していたことが窺われる。鈴木主善堂に保存されている天秤鞴の状況からして、鉄釜製作にも天秤鞴が使われていたことが判明する。

まとめ

南部鉄器について調査してきたことに関する若干の考察をしてきた。一七世紀から鉄器生産が行われており、技術伝承において貴重な存在である。

南部鉄器の経緯については、江戸期と明治期に区分される。

江戸期においては、御釜師・御鑄物師として保護されていたこともあって、技術は伝承してきた。とりわけ鉄瓶は茶道用にも用いられたことから、質の高い作品が造られ、それが盛岡文化の象徴ともなった。

明治期以降では、明治初期の廃藩置県による藩の保護喪失と注文取りによる打開、大正初期の南部鉄器研究所の設立、太平洋戦争期の南部鉄瓶技術保存会の結成に画期を見ることが出来よう。これら一連の経緯からすれば、南部鉄器が存続してきた要因は、技術の保全と向上にあるとみなすことが出来よう。

南部鉄瓶技術保存会に結集した諸家の多くは廃業しており、いま新たな危機に直面している。

参考文献

- (1) 沢田勝郎『南部鉄器小史』(岩手史学会、一九六七年一一月)
- (2) 岩田由輝「東北の伝統産業史（一〇）南部鉄器（岩手県）」(東北開発センター「東北開発研究」一一七号、二〇〇〇年)
- (3) 柴田四郎「地方の名門企業——四五——盛岡 鈴木主善堂——南部鉄器はよみがえるか」(毎日新聞社「エコノミスト」六一巻九号、一九八三年)